WASON
HQ
1104
J74

MAY 1893
no. 345

明治廿六年五月二十七日發兌

女學雜誌

第三百四十五號

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號目錄

時事

地久節

恥らふ可き醜態

隨感

人生の觀深き想○歌ふ人○今春、花を觀ず○神に近き人○浩然の氣○物の哀と人の情け○情けの極致○能因、頓阿、花山僧正、沙彌滿誓の歌

兒籃

黃金機會（若松しづ子）

小說

春風裡（トオストイ伯作、不知庵主人譯）

家政

五才の本貢（若松しづ子）○食物養分比較表○田家の暦○園藝法

雜錄

米國の下婢○笑ひ草○隱士經綸錄

時論

男女高等師範學校を合併すべし○何故に高等女學校敎員は恩給を受るを得ざる乎○一時の混雜に避易す可らず○米澤鷹山公の廢娼論○をしろい分析表

女報

前號目錄

時事

女學生德育者の謬見○女學校の英語科○奬學金候補者當撰○北海道の女子敎育○カロライン、カークス夫人

家政

子供に付て（しづ子）○牡丹の花瓣を食用にして貯ふ法○貝類を貯ふ法○魚肉を酢漬にする法○筍を砂糖漬にする法○

史傳

板垣伯、母公の事を話す（門奈矩理筆記）

論說

女子敎育と英文學（仲田誠四郎）

兒籃

黃金機會（中）若松しづ子

小說

春風裡（トオストイ伯作、不知庵主人譯）

雜錄

端午○男の節句○幟の起原○屈原の事○田家のこよみ○園藝法

摘要

一燈錢申合の事

書架

女子敎訓、道の栞○賢女修身事蹟○消息文典

女報

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十六年
第三百四十五號
五月廿七日發

時事

君が世に今いく度かかくしつゝ、
うれしき事にあはんとすらん。

地久節

うや〳〵しく祝ひ奉つる。幾年のむかし、五月二十八日と云ふ日、天、此の后を世に降して、我が日の本の國の母とは爲し玉ふ。文德、月に歳に彌や增りて、慈仁の御情け、今や、天下にあまねし。われら、女性、生れて此の聖き御代に會ひ奉まつり、陛下を戴だきて、吾等が範とし、御敎を遙かに窺がひて、方今の女道を盡さんとす。其光、日月の如し、其澤雨露にまさる。則はち、吾等つとめて御敎を循奉せんとす。

恥らふ可き醜態

近日の出來事なり。或る公使館にて、藝妓の、老ひたると、中年なると、俗に雛と稱ふると、年配容色の異なるもの六人七人が程を招き、之を日本藝者の標本なりとして一々寫眞に撮り、尙ほ之にさま〴〵の藝を爲さしめて、其姿をこと〴〵く寫し取り、珍物として本國に送りたりと云へり。新聞紙之を傳へて、慷慨の論あり。吾黨も亦然り。何んぞ只だ吾黨のみならん、日本人にして骨あるもの、誰か之に憤慨せざらんや。然りと雖ども、事の實際は、尙ほ之よりも甚しきものあり。橫濱居留の外國人などは、金若干を與へて日本女子を招き、之を裸躰にして遊戲せしめ、其醜躰に笑ひ興じて酒に耽るものあり、而して、其纏頭料、もとは一回五弗なりしが、今は追々下落して一二弗となれりと云ふ也。あゝ、昔しは一夜源平の客に均しくなぢみ、呉越の讎敵に共に契を凝めたる、醜女遊君すら、尙ほ、ふる亞米利加には袖をぬらさじと慨したる氣節ありしに、今は則ち斯の如し。無禮、度を極めたる外人に憤ふり、賤汚不憫の限りなる醜女輩に歎ずるは扨置き、先

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

づわが帝國の譽れの爲めに嗟歎慷泣の思に堪へず。苟しくも血ある男子、何人か之に泣かざらん。然れど、生れて性を同ふし、均しく女と稱へて、我國同胞中の姉妹と縁みたる、世の婦女子諸君は、甚感更に一層ならんと推はからる。諸君が同性は、日本婦人たるの見識を汚がすと如此きなり。日本婦人たるの操を破ると如此き也。諸君、それ之を何如にか聞き玉ふ。

更に驚ろく可き事あり。諸君もし之を聞かば、恐らく慟哭し玉ふなる可し。左れど、吾黨は、今ま之を記さゞるを得ず。抑も、事情に明らかなる人の申すよう、外國人に密かに賣附くる汚らはしき寫眞數々ある中に、遊廓悪處の婦女子が裸躰の態、又は、思ふだに忍びざる醜躰の姿を寫したるもの多くあり。夫すら、殆んど堪へがたかるに、日本貴婦人として名ある歴々の御方が、腰より下を曝露して驚ろく可き様姿を爲したるを寫したるもの時としては有りとぞ。此は抑そも如何にして如此きものありやと云ふに、狡猾なる寫眞師、その貴婦人の腰以上に、他の汚らはしき女の腰より下を接ぎ合せ、之を一つにして製造寫眞を作りたる也とぞ。此を見る外國人中には、もとより半ば信ぜざるもあるべしと雖ども、亦信ずる族もなきにあらず。たとひ信ぜずとも、現に某貴婦人の醜躰なりと稱して玩弄品とせられんと、實に堪がたし。かゝる賣國賊汚の寫眞師何處にかひそむ。悪みても尚ほあき足らずと雖ども、警察官の取締亦た之を何如ともすると能はず。現に今も尚ほ續々として行はると云へり。

あゝ滔々たる此の妻流、日本の芥を浮べて遠く海外に流る。夫れ、何を以てして、此を防がん。吾黨思ふに、其策、枝葉に出づ可らず。枝は千々あり、葉は万を以て數ふべし、一々之に隨つて策を施こすとも、何の効あらんや。吾黨は、先づ其根本に向つて、大斧鉞を加へずんばある可らず。と。根本の策とは、他なし、公娼を廢すると、是れ也。先づ、公娼を廢して、醜業、醜態の恥かしきとを知らしめ、知りて尚ほ行ふものには、之をして慎しましむるに至らしめ、慎しみて尚ほ弱きものには、之をして他の制裁を受るに至らしめ、以て、輿論の力に假り、公衆の良心に頼りて、此の汚らはしきとの公然、横行するとを禁止する也。もとより、此策にて万病直ちに治すべしとは言はず。左れど、此の療法を以て、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

根本より救ふ所ろなくば、他の姑息策は、遂に、其甲斐ある可らずと信ず。

蓋し、外國人に對して、かゝる大恥辱を受るの責は、多少我邦上流の紳士諸氏に歸せざるを得ず。諸氏の宴會に於て、藝妓を玩弄し、又は之が躶躰をどりを所望せらるゝと無きにあらず。海外の賓客に藝妓を出して待遇したるとも無きにあらず。甚しきは、外國人を遊廓に伴なひて之が見物の案內したる高等官すら亦無きにあらず。而して、本邦繁華の都府市町には、各所に巍々たる大樓を築かしめて、公衆が公けに淫猥のたわれを、為すに任す。夫れ、本邦內治の取締りなきと、如此く、本邦士人の所行先づ如此しとせば、外國人が、日本女子を輕んずるに至るに、多少の因緣ありと斷念せざるを得ず。然るに、單に彼に慷慨して、毫も我に省みる所なきは、病を治するの途にあらざる也。古人曰く、人先づ卑しみて而して后ち他人之を卑しむと。犬は、籬の破れより竄り、虫は幹の腐れたる后に生ずる也。

此故に、吾黨は、公娼廢すべき論を主張す。到底、之を實行せしめずんば、止まざる也。而して、世の婦女子諸君が、勉め玉ふべき方途は、之と旨を同ふして、其方を異にするの巧法あり。左に、之を勸告す。

蓋し、男子の悪處に戲むるるは、其慰さみ下等なると言ふ迄もなしと雖ども、亦これ眞に慰さみを要する也。故に、單に之を止めよと言ふのみにては、未だ効あらず、直ちに其慰さみを禁止するのみにては、未だ悉せりと言ふ可らず。更に佳なるは、之に淸き優等なる慰さみを供へ、其慰さみにほれて遂に下等なるたわぶれを嫌忌するに至らしむるに在り。俗人も聖なる音樂を聞たる后は、暫しがほど俗談を卑しと感ず。花に見とれたる瞬間は、無風流者も、思はず、酒を忘るゝとあり。要は、俗腸を轉じて之を淸き樂しみに移らしむるとを旨とす。此故に、男子をして、悪處の慰さみより去らしめんには、之に代るに足る淸潔なる他の樂しみを供ふべき也。婦女子諸君が手一つにて、之を供へ玉ふと、決して難しとせず。即はち、姉妹は、其兄弟に淸き同情を寄せ、之に潔よき愛を與へ、心氣爽快にして下賤の行ひなからしむ可し。年少男子が、女子に戲むるるは、單に肉慾の為のみならず、第一、女性の優しき同情を求めんとするなり。故に、姉妹にして、若

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

し、此同情を寄せ、武骨男子をして、其烈膓を伸し、其熱感を輕くするの相手あるとを得せしめなば、世に在觸れたる少年の放蕩は、十中七八を減ずべし。世故に經驗したる老人の話に、仲の好き姉妹ある少年男子は、大抵放蕩せず、もし放蕩せば、之を諫止するもの、その姉妹に及くものなしと言へるは、蓋し、此邊の意味あるによる歟。之れ、姉妹が其兄弟に慰さみを與ふるの方なり。

夫人が、ホームを樂しくして、良人が出歩きを減ずるの工夫は、古より人の知る所なり。高の師直すら、判官に向つて此眞理を穿ちたり。家に愛する者あり、ホームに潔白の樂しみあらば、如何なる輕薄男子と雖ども、大方は愼しむ所ろある可き也。

右は即はち婦女子諸君に適當せる、公娼廢止の裏道たり。更に一つの此に似たる良法は、諸君が品格を高ふし、諸君が地位を進め、世の男子をして、自づからに諸君を敬重するに至らしむるにあり。演戲などにて、下郎が、婦人に迫るの狀態を考ふるに、其懷劒に懼れずして、其凛乎たる風采に懼るゝの情を寫すと、如何にも妙なり。凡そ人間は、徳に對するとき、尤とも弱はし。仁者に敵なく、弱よく强を挫しぐの理は、玆にあつて存す。左れば、婦女子諸君にして、其天禀の美徳を發揮し、高潔にして愛ふかく、情濃やかにして貞操堅固ならんには、其風采を一見するもの、先づ粛然として愼重の念を生ぜん。亦何のいとまありてか、下賤卑劣の情を寄せんや。吾黨此の主旨に於て、今の日本畫に惜しむ所多し。近代、世に名ありし美婦人の畫を精察するに、其容顔多くは女郎、藝妓の風丰あり。笑ふ可きは、世評頻々たりし或る觀音像の御顔までが、世の婬婦の面躰に似たるの一事にてありき。これ決して、日本に高潔なる婦人少なきの故にあらず。日本男子が自由に交際して「是れ女性也」と知る所の女人は即はち大極惡處下品の女原にして、此外に其理想の觀念たる可き婦人あらざるが故のみ。左れば、男子が、女性を見るの眼識、大率ね低く、未だ初めより其徳なるものに考がへ及ぶとあらざる也。吾黨は、多くの女友を知れり。而して翻がへりて男子諸君が女性に對する想像を聞くに、其事情に暗きに毎度喫驚せざるを得ず。思ふに皆これ、女子の徳を知らず、惣じて女子は小人と相併び、女郎と相去る遠からず、大抵男子の自

由になるものと見極むるによる。先づ、失敬千万の覺悟其の腹裏に蟠かまるによりて則はち女子を玩弄物とし器具の如く待するの悪僻生ず。思ふに、妓を弄そび、淫にたわるゝの初め、多くは此邊の見識に兆す。左れば、婦女子諸君にして、其德を煥發せしめ、哲學者のコムトをして「婦女に祈禱せざる可らず」とまで思はしめたる、其美なる天稟の女性を世に顯揚するに至らば、男子は自然に之に服し、之を重んじ、之に愼しみ、遂に之を弄ぶなどの悪慣を減ずべし。此に至らば、公娼亦滅じ、淫猥の風亦退ぞくべし。是れ豈に亦公娼廢止の裏面の策にあらずや。

凡そ、策は人によりて、適不適あり。女性は則はち、優に靜かに、施こす所なかる可らず。然らざれば、一弊を除かんとして、更に第二の悪感情を引起し、弊害遂に長久に盡きざるべし。

近頃ろ死せし佛國の學士にして、井上博士が其著作に推尊曾ならぬ、ルナンは曰く、余は是れ四人の女を愛したり、第一は余が母、第二は余が妹、第三は余が妻、第四は余が娘なり。余思ふに、凡て終りの日、大ひなる裁判あらん時には、其裁判の標準は盖したゞ是か、云く、全能なる神の許しを經て、交際せし女は何人なりしや、と。

隨感

萬鈞腕力强二千弩一、朝射二熊羆一夜賦レ詩。

○人生の觀深き想

人生を觀ずるとの極めて深き思想を、宗教の心掛とは云ふ。之を必らずしも、抹香くさきものに限ると思ふは、僻事なり。左れば、詩歌に、宗教の想なき時は、淡くして味ひ薄し。之れ人生に對する深き觀念なきが故なり。此を以て、日本の歌は、佛教入りてより、忽然として進みたり。法師に秀詠多き所以こゝに存す。われ、歌集をよみて、豪壯なるもの、質實なるもの、淡素なるものを他に求むるとあれども、眞とに歌の聖絶なるものに至りては、特に其佛教の觀念より發せしもの耳を撰ばざるを得ず。故に、法師に、歌仙多し。遍照、素性、喜撰、能因、西行、慈圓、寂蓮、蓮性、頓阿、兼好の類これ也。而して、其感化、歌の情と相融和して、邦人の美の觀念

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

を染たり。此を以て、目今の美術思想は兎角に、厭世、懐疑に流れ、靈魂不死の聖理を消さんとする者多し。因縁百世より下り、影響、千歳のものたり。之を變ゆると、決して議論を以てす可らず。更に大ひなる歌よみありて、其歌の神の冥助によりて、之を化せずんばある可らざる也。われは此領に批評の冷然として嘲けるとを容さず。

○歌ふ人

われ、曾て、雪景色を見たり。一天、何處とも知らず、最と白きものを下し、黒土一面、忽ち銀世界となりぬ。松は微かに緑の裏を遺して、白帽を嚴そかに冠むり、葦は、滿身に綿を負ひ、腰を曲げて、蹌浪たり。預言者の叫び、大俗の耳に入らず、孔孟ありてより三千年、支那尚ほ汚れたるに、此の白きものは、一朝にして、万物を潔よく化えたり。往來の人、皆な畫中の仙にして、犬も尚ほ風流に吠えんとす。大家、小家、一つの閨に包まれて、地上一面に共同の白衣を着たり。耕夫界を爭そふとを要せず、田圃皆な相平均せり、聖人は樓上に打吟じて歌やよむらん。窓を開けば、寒風尚ほ春の如く、飛絮紛々として花に似たり。神心瓢忽として高く飛べば人生の景色妙にして美なり。詩想湧くが如く、歌神切りに招きて命じ玉ふらく、汝ぢ歌ふの人とならざる乎と。われ、此時、此日を追懐する毎に、百躰の塵脱然として消ゆ。

○今春、花を觀ず

ことしは、遂に花を觀ざりけり。目之を見ざりしにはあらず。心にしみて之と情けを交わし、夜をこめて樹下に打吟ずるの習ひを奪はれ、全春遂に舊知己と相會ふとなくして別れたる也。去年の春は、家族と共に舟を墨陀に浮べんと約して、忽まち旅にやつれ、ゆく／＼所を定めずして、客舍に春を迎へたり。同志、之をあわれみ、わが歸京の日、己れを招きて舟遊せしむ。舟三艘、友百十、舷を叩きて歌うたひ、園に戯れて靜かに樂しみたるは、昨日の如し。然れども、此時既に花落ちて、花ひとり吾を迎ふるの數に漏れたりき。今年、未だ一と度びも足を墨堤に着けず、夢は大和をめぐりて、身は簿冊うづたかき中に沒す。僅かに庭前の數株、一片の落花を風に托して、吾が机上に落すを見やり、默然として打吟じたるともありき。今ま、昨冬の雪を記すに當りて、慨然たると久しく、遂に亦た此小感を書いつけたり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

○神に近き人

宣教師クレル氏、ウイリアム、ペンネフハザー氏の聖德を追懷して曰へらく、

余は六ヶ月間、彼の人と共に働らき、一生忘るヿ能はざる感化を受けたり。彼人と共に在れば、說敎壇にても、聖書研究會にても、祈禱會にても、協議の集りにても、「もし二三人、主の名に於て集まるとき、其處に、吾等の神居まさん」との意味を、現實に味わい得たり、と。

あゝ、之に接したるによりて、神の近く居ますヿを覺るてふ人品こそ、世の寶なれ。市に人多しとて、わざ〳〵山林に遁れ、非情の草木に對して初めて心を潔よくすと云ふものあるは、何たる悲事ぞ。吾黨は、神の近きヿを感ぜしめらるゝ人物を慕ひ求むるヿ切なると共に、亦、人の爲めに、幾分にても、此感を與へ得べき資格を備へんヿをつとむるヿ切なり。

○浩然の氣

浩然の氣は、何人も同もに養なはずんばある可らず、男女によりて之を異にするの理はある可らず。然るに、浩然の氣と申せば、何か疎大なる事に限るよう誤解し、英雄豪傑の心掛なきものには、企だて及ぶ可らざるヿと斷念らめ、婦人女子には入用なきものゝ如く論ずる族なきにあらず。以ての外の誤まりと云ふべし。浩然の氣とは、正直にして僞はりを言はず、俯仰天地に恥ぢざるの氣合ひを言ふものにて、何人も皆之を欠く可らず、即はち、眞勇大安心を生ずる基ひにして、其根本は、正しきに合ひ、天地に懼るゝ所ろなきの覺悟にてある也。藤田東湖先生が書狀の中に、左の句あり、

世の中の人、浩然と申候へば、何か豪放不羈の樣に心得違ひ、亞聖(孟子)の意に背き候は勿論、注家の意にも戾候。是はろく〳〵書を讀まざるの弊、論ずるに足らず候へども、氣質高明にて世の齷齪を慨歎する人抔には、あしく致し候はゞ此浩然が害をなし候事も尠からず候。浩然の氣天地の間に塞がると申事、容易に見候時は、誇大の言に近き樣に被存候處、着實に工夫候へば、孟軻氏不欺我存奉候、大學の愼獨、又は心廣體胖、中庸の至誠不恥於屋漏、其外、仁智勇不憂不惑不懼云々、即はち醇乎たる光明正大の氣にて集義所生と奉存候。大酒を飲み人を惡口し其外豪放不羈の行ゆめ〳〵集義とは

不被存、跡にて後悔候類、氣餒候樣にては、世俗の所云る浩然なるものたまく眞の正氣を害するの理と申事を認申候。

○物の哀と人の情け

物の哀れは、戀愛より知り初め、身を人に與ふるの樂しみは、愛する者定まりしより、現實となりぬ。意中に若し思ふ人あるときは、幽谷の蔭にも尙ほ春の花心地あり。此の念未だ定まらざるに當りては、市に千百の人に會すれども、宛がら人なきが如し。夫れ、戀愛は、必らずしも形骸を一つにするの謂ならず、たとひ言語を交へずとも、有情の下、豈に無聲の聲なからんや。一面の會見に、百年の知己を感じ、石火電光啻ならぬ意氣を以て、心底の底に一諾相許すの證を交す。肉は、肉と共に亡ぶべし、但だ靈交は千万年の事にして、長久不斷之を破るとなし。神の合せ玉ふもの、人安くんぞ離つとを得べけんや。世上、良人あるの寡婦多し。何を以てか、未婚孃の心中久しく百世の夫あるとを奇しきとはする。朝々、夕々、流るゝ細き小川に孤身の影を映じ、野花一枝を手折りて、無名の人に供ふ。此人、死せしや、生くるや、神の外、知るものなし。孃は只だ、万々年其意中に於て、之を生かし、之に親しみ、之に待するとあるのみ。むかし、王子猷、月の光すさまじき夜、舟を浮べて、其友を尋ね、門に到りてわざと入らず、會わずして、歸る。歌つて云く、

　もろともに、月見んとこそ、おもひつれ、
　かならず、人にあはんものかハ。

此人、けだし、彼孃が意中に同情を寄すべき者也。

○情けの極致

客を招ひて最とも樂しむ時は、庖厨に最とも勞する人あり。我身の榮樂をのみ慮ばかりて、人の苦を忘るゝこそ情けなきわざなれ。彼の、馬を驅つて山野に獵し、雄鹿、雌鹿を樸殺して、意ふ人を悅こばせんとする痴男は言ふに足らず。草村に美くしき聲はなちて雌に鳴く虫を捕へ、小さき籠に入れて檐端に吊し、團扇あほりつゝ男と共に打きゝて風流めかす女など、等しく心惡けれ。夫れ、戀愛は、情けの極致なり。故に、眞に戀せし人は、惣じて何物にも優しきものときく。一輪の野の花を摘まんとして、蝶の怨に思ひ遣り、乍まち歩みをとゞめて、小鳥の群れ遊ぶを驚ろかせじと制するなど、其心掛の濃や

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

かなること。大率ね如此きなり。唐物語に、賈氏と云ふ人あり。たぐひなく形わろく見惡かりしが、美しき女をめとりて之を悦ばせんとして、三年其甲斐なく、或る日、春の野に出でてもろともにあそびけり。雉子その姿にほれて、澤のほとりに立ち居たるを、われ弓矢に心得ありとて、たち所に射倒し、初めて女の笑ひを買ひ得たりとなり。之に打笑みたる女は毒婦なるべし。之にて毒婦の愛を購ひ得たる痴丈夫は、抑も何ものぞ。風流も玆に至りて、泥土を被れり。

燦 七

山寺の春の夕ぐれ來て見れば、
　入相のかねに花ぞちりける(能因)。
ふるさとは散る紅葉ばに埋もれて、
　軒のしのぶの秋風ぞふく(頓阿)。
我宿は道もなき迄であれにけり、
　つれなき人をまつとせしまに(花山僧正)。
わび人のわきて立よる木の本は、
　たのむかげなく紅葉ちりけり(同)。
里はあれて人はふりにしやどなれや、
　庭もまがきも秋の野らなる(同)。
世の中を何にたとへん朝びらき、
　こぎゆく船のあとなきがごと(曼沙彌)。

兒 藍

小見は何の功も爲すまじ、
　左れど大人は皆嘗て小見たり。

黄金機會（下）

若松しづ子

さて私の誕生日も過ぎて一週間あとになつた時までも銀貨は銅貨とも〳〵例の絹の袋に居殘つて手をつけずに有升た。私は一旦落した氣も今は漸く取り直して、あの銀貨はどふしてつかわふとソロ〳〵分別し始め升た。一錢銅貨なんぞどふ出來よふと思ひ升た故、それは始めからあてにしては居りませんかつた。

私の直近處に鹽煎餅を賣つて細々暮らしを立てゝ居た可愛さうな後家が有升たが、母は家政を整へて次には貧民の面倒を見るとを義務にして居た人ですから、此後家を氣の毒がつて

何かにつけて力になつておやりでした。丁度此時分此女が少し病氣で、いとゞ不自由の中を十日計りも寐て居り升たから、母は折々私をつれてこの女を見舞ひ、私は母に申つけられて毎日の様に參つた食物なども運んでやり升た。ある日母は獨りで此女のところへ行つて來たかへりがけに、私を見かけて一寸と手でまねき、かふいひ升た。

おまへ、あの銀貨をあの金貨の埋合せになんぞ善いとにつかい度とおいひだつけネ、あの鹽煎餅やのかみさんもモウ大分よくなつたから、二三日中には田舎へ行切りに行くつて、けふいつてましたよ、おまへもあの女に今まで可愛がつてお貰ひだつたから、日和下駄の一足もそれで買つておやりだと好ネ。それとも外につかひ道があればだが。

いゝへ、かあさま何にもつかひ道を考へちやないの、だから買つてやりますよ、本とふに好と、かあさま悦び升かネ、それは大悦びでせうよ、それではそれとお歸だネ、おまへが買つておやりでなければわたしが買つて餞にやらうと思つてたのです。おまへ又お忘れでないよ。おとうさまが明日は町へお出でだから其時行つて見て來たら好でせう。

私は先日の取りかへしをする積りで心嬉しく、イソ〳〵して居る處へ私の從妹二人から其晩言傳があつて、明る日の午過に遊びにくるといふとでした。これは私が自分で玉蜀黍を蒔いてよく出來たから見に來と此間いつてやつたからので、私の大中好の人たち故、日和下駄一件は一寸忘れてしまひ、其晩枕についてからもいろ〳〵あしたの樂しみのとを思て、夢にまで見る位でした。あくる日になると、私は朝飯前から畑へ出て丹精の植物を眺め、艶〳〵した葉の緑の吹流し見た様な處、アツサリした茶色の髪が奇麗に垂れた間から黄金色の實の見へる鹽梅などをト見カウ見して、從妹たちがどの様に羨しがるだらう、折角美事に出來て居るものだから惜しいけれど是非二三本は掻いて御馳走せねばなるまいなどと。考へる中にフト思ひついたとが有つて、手を拍ち升た、さうだ〳〵、さうしやう、此葦洲と此朝顔、これを上へ這わして丁度好涼み場になる、玉蜀黍畑もよく見へるとゝへと獨りで合點した、折しも朝飯が出來たとて、母の聲で呼ばれ升た故心に樂しみある身は、何より輕く、トン〳〵跳ねながら家へ參り升た。

御飯も大急ぎに濟まし、作男のぢいやに委細を呑込ませ、四角に竹を打込むから、よしづを廻り三方と屋根へくご繩で結びつけるまでもして貰らひ、あとは自分でさま〴〵工夫を凝らして見憎處のない樣に朝貌の蔓をあちらこちらへ這はせ升た。此凝膽をして居る最中に父が出て參り升て、

アゝおまへこゝに居たチ、おつかさんが町へつれてつて呉れろといつたが、行くなら早く仕度をするが好い、直と出るから、

といひ升から私は時のたつたにビツクラし、

オヤモウ十時ですか、今行けば此凉場がどふしても間に合ひませんチ、

何に間に合わんといふのだ?

アレ、とうさま、吉田のとしちやんと秀ちやんがくるんですよ、モウお忘れなすつて?

さうだつたナ、さういふ大切なとを忘れては濟まんかつたゝアハゝゝ併しあれらが來る設にするのならば、家に居て拵らへてしまふがよからう町はまたこん度としてナ。

父は例の下駄のはなしは少しも知らぬもの故、かふしたので、それを知つてはこの樣には勸めなかつたらうと思ひながら私は家に居度くもあり、さりとて前日の決心に對し、行かぬといへば何となく濟まぬ樣なりて、少しく躊躇つて居ると、母も出て參り升たから、母に賴んで諦めて貰らわふと思ひつき升た。父は母に

この兒は今拵らへて居る凉場を仕擧度さうだから、けふはうちに居るとしたらよからう、それにけふは連れて行つて都合のよくないともあるから、尤も大した用事なら格別だが。

母が答へる暇のない中に父は足早に家の方へ行つてしまひ私は朝貌の蔓を手に持つたなりで惘然とあとを見送つて居り升た。母は私にあとを追ひかけて行けと命ずるかとおもひ升たが、さうもせず、併しどふやらヂツト私の樣子を見て居る樣に掛念されて、まだモヂ〳〵して居升と、折よくぢいやが庭の草花を植へ直す指圖をして貰らひに來て、母はぢいやを先にたて、行つてしまひ升た。私は始めてホツト息をつき、下駄はいづれ其中に買わふと自分ながら氣安めな考をして居り

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

升た。

私はこれより心のムシヤクシヤするのを追拂ふ積りで一際精神籠めて働らき、晝頃までに美事立派な亭が出來あがり升た。高さこそは私の丈より少し低ひ位でしたが、三人坐つて遊ぶにはもつてこいといふ加減で、下にぢいやに頼んで枯草を敷いて貰らひ、其上へ胡座を敷やらおもちやの茶道具を運ぶやらすつかり來客の仕度をして待つて居り升た。

午飯をしまつて少し過ぎると、二人の從妹が參り升たから剅畑を見せ、手製の亭を見せると、二人は慾目で見る私さへ滿足するほどに賞揚してくれ升て、私も大分得意になり、此日はいつもより身に染みて愛想よくし、三人とも暮方まで思ふ存分遊び興じ升た。遊びに耽れば是非思わぬいたづらもするもので、私は此日父の言つけを忘れてウツカリ桃の實を屋根へ投り擧げ、二階座敷へ近ごろいれた大阪のガラス二枚破し升た。

此日は土曜日でしたが、あくる日曜日を措いて、月曜日學校から、歸つて來て家に居ると、父が窓下を通る處を見かけ升たから、側に居た母にもし父が町へ行くのならば、一處に行き度と申升た、すると母が

おまへ何しに行くのだへ？

あれ、かあさま、鹽煎餅やのそばさんにやる下駄を買ひにですよ。

ア、、それならば、モウ今朝早く立ち升たよ。

母は私の顏を見ず、何となく不興氣にかふいひ升た。さうして見れば、母は私の忘れて居る間に下駄を買つておやりなすつたとか、もしさうでなければあの歯かけ下駄をはいて田舎まで行つたかしら、あの人はよく私を可愛がつて呉れたつけに、、、、ア、わるひとをした、又しても面目ないと思ひ出し、一言も口へは出ず、ソツト抜け出して、庭へ出て見ると、バツタリ父に出逢ひ升た、父は南向の二階座敷を下から眺めて、ガラス障子の穴に氣の附たものと見へ

ア、、これ、あの障子はおまへがこわしたのか？

うつむく私の樣子を見て、少し嚴しく、

此間もよふくいつて聞かせたらう、下の障子をこわした時、又忘れたのか。

私はやうやく頭をあげ、

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

おとうさま、御免なさいな。
おまへは詫をしても忘れるから困り升。今度は忘れさせない樣にせずばなるまい、おまへ自分の金をいくらか持つて居るか？
二十錢の銀貨と一錢銅貨と持つて居升の。
中〳〵それではあのガラスを取代へる事は出來んが、先づ其錢はおまへのいたづらの罰金にとつて置かふ。
かふ聞くと共に私の眼は淚で一杯になつて、例の袋をさぐる手先が見えぬ程でした、それ故父の顏も見ず甲斐絹袋のまゝ渡し升と、父は妙なかほつきして暫らく其袋を眺めて居り升た。さまで念入れに拵らへた袋を見ては、罰金をとるのが可愛さうになつたのでしたらう。
おまへこれ丈しか持つて居ぬのか？
エー………あと銅貨が一ツある切り………
といつて、私は子供ながらも、父が其金を罰金にとるを非常につらく思つて居つたとはよふく分つて居り升た。父は手の平へ其袋を載せてやゝ姑らく眺めて居り升たから、私は今度限り勘辨してやるといつて、返して呉れるかと一寸は思ひ升た、併しそれほど姑息な父ではありませんから、懲めはつまり私の爲と思切つて、其金を懷へ收め、
これに懲て今度はモット氣をつけるが好い。
といひながら向ふへ行つてしまひ升た。私は父の影が見へなくなると直ぐ前日拵らへた亭へかけ込んで、聲を惜まず泣叫び升た。
子供のうち過をして罰せられた時泣くのは、自分のわるかつたことを後悔するのか、罰しられるが悲しいのか、よく區別がつかぬものです。私も此時までは罰しられて泣く時の淚の譯を我ながら知らずに居り升た。然るに此時はいたづらをして罰金をとられたといふよりも、父が當惑な顏をして、心を痛めたといふことに………自分が遊戲に耽つて善をする機會を失なつてしまつたといふよりも、なぜ自分はかふも意氣地なく善い決心が守れまいといふ口惜さに泣けたのでした。私はまだ泣ながらフト頭を擧げて見升と、父が氣の毒さうな顏をして側に立つて居升たから、なにやら耻しい氣がして、口早に、
とうさま、あのお金を取りあげておしまひなすつたつて、泣

てるんじや有ませんよ。

それでは何を泣て居るのだ?

といつて、私を椽先まで手を引いて行き、側へ坐らせ柔和に私の憂の基を問ふてくれた父に私は心をすつかり打あけて、どふぞ決心のよく守れる仕方を敎へてと頼み升た。

存外おはなしが長くなり升てお躰風でせうが紙數が限つて有升から銅貨のお話しは此次へ廻します。

思ずばつれなき事もつらからじ、
頼めば人を恨みつる哉。

小説

春風裡

第四章（一）

トオストイ伯、著。
不知庵主人、譯。

間もなく『アッサムプション』(祭日の名)の齋日が初まり、自分の誕生日は此週の終りの日であるから、例の通り『サクラメント』の式を擧げんと其準備に掛ッた。

セルギイ、ミハイエロウヰチは到頭此週間は見えなかッたが、自分は更に物憂しとも思はず、唯自分の誕生日にさへ來て呉れゝば足れりと思ひ、其週間は毎日告天子と共に早く起き、唯一人で庭を散歩し、過ぎつる日自分が犯せし過失罪業を臆起して再び其惡事を爲すまじと心に思念を凝してゐた。」

朝飯を濟まして自分は直ちに馬車を驅りマカアと共に侍婢を一人連れて三里離れし敎會堂へ行き心に祈念を凝しながら隨喜渇仰して苔蒸したる石階を登ッた。

何時でも今頃は十二三人の勞働者或は農夫のゐるが常で、自分は一々の挨拶に叮嚀に會釋して堂守から御像の前へ置くお蠟を買ッた。

聖壇の口を覗いて見ると、亡母が刺繍をした打敷があッて、神聖なる帳の上には星辰を羅織せる衣を纏へる二神使ありて我が子供の眼には頗る大きやかに見え、又其上には黄金の光を放てる鳩ありて我が稚なき心には感歎畏敬の念一と通りにあらず。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

奏樂處の格子の背後に自分が曾て洗禮を授けられた洗身盤がありて、老教主は自分の父の棺衣で裁つた頸巾(袈裟の類なり)を掛け、ソオニヤが受洗の時亡父母が葬式の時から聞きなれた平板調の讀經を初めると、續いて奏樂處の喧然たる合唱と、是まで度々會堂で出會ひいつも壁の聖像に向ひ涙にうるむ眼もとで見上げ合掌して禮拜し呟く樣に口裏にて祈禱する老婆の皺枯れ聲を聞いた。

何れを見ても悉く自分の見馴れたもので特に珍らかなものもないが、此日は如何した譯だか總て目新らしく物珍らしげに見えた。

自分は獻身の心をもて此祈禱の中に加はり一心に我が過去の罪業から救はれん事を祈請し、そゞろに過ぎつる日に我が爲せし樣々の過失を繰返すと身内に粟の生ずる如く背筋から胴震ひが起り過去は唯罪惡の黒幕に包まれしかと思はれた。志かし神の前に懺悔して總ての事が洗去られて見ると、萬籟熄んで天地澄然たるが如く神氣活々として、若し罪業が一層深ければ之と共に垢を洗ひし身の心は愈々清々しかるべしと思ひ、餘念なく祈請を凝し只管神の救を願ひ、教主が『神の御惠は爾と共にあるべし』と云ふを聞くと、胸裡に蟠まりし苦の塊物は旭日に向ふ雪の如く消失せて光明と温情をもて充滿した。

此儀式が濟んで教主は自分の傍に來り夜の禮拜には自分の家に來り能はぬ由を述べ、自分は慇懃に挨拶して自分自身が教會に集る旨を答へた。

『それぢやァお入來下さいますか』と渠は訊ねた。

自分は何を返事して可きかを知らなかつたは或は輕率に答へて禮を缺きはせぬかと思つたからである。

斯くて此日はいつもマカアと一緒にゐない時の如く馬車に乘らず態々泥深き道を歩行で家に戻つた。

或る晩我が家の執事が農夫のサイモンが死んだ娘の棺を作る板を貰ひに來たとマカアに咄すを傍聞して、

『そんなに貧乏なのかネ』と聞くと、

『麵包につける鹽がない位です』と答た、(魯西亞の俗語にて極めて貧乏なるをいふ)。

自分は此咄を聞いて何だか氣色の惡い樣な心地がしたが、全時にふつと考慮が起つて急に思立ち、マカアには散歩に行くと言拵へて二階の我が部屋に行き、寡少ではあるが有るは

どの自分の小遣錢を搔集め、庭口から近き村へと走り、サイモンの家に行き竊と人知れぬ樣に窓框の上に金子を置いて表の戸を叩き『誰だイ？』といふ聲を聞いて殆んど罪人の如くこつそりとヌキ足で慄へながら逃出した。

家に歸るとマヽアは自分に向て何れに行きしや又何事かありしやと訊ねたが、自分は何を聞くか分らず返事もなさで我が部屋に引籠り、何をするといふ方角もなく、考へる事すら覺束なき樣な心地がして、部屋の中を運動しながらサイモン一家の喜悅を心中に描き、定めし此隱德者に向て感謝しつゝあらんと考へ、若し又セルギイが自分か行つた此慈善の始末を聞いたら何と思ふだらうかと色々に繰返して竊かに偶然ながら他人に恩惠を施こした自分の措置を喜び、嬉しさの餘りに獨り笑ひ或は泣き、終には跪いて神に祈り、何故だか分らぬが天上天下何物も皆可愛らしく我も他も諸共に不思義なほど最愛しくなつた。

其日は暫らくの間聖書を熟讀し、讀めば讀むほど愈々神の道が最も安心立命を得るに近き樣に思はれ我々の來世はイエスを經て益々圓滿幸福なるべしとの希望を描き、さて現在の境遇に思返して見ると總てのものは悉く燎然として、正路に世を渡り他を愛し又他に愛せらるゝより以外に人間が爲すべき事とてはなく、實際是は服從せざるべからざる自然の法則であつて、と思つて考へると、萬物皆最愛しく思ふ自分自身に對する各物は悉く善良親實笑て相見ざるものなき樣な心地がして、是までと違つて熱心誠意をもて敎ふると、ソオニヤすら此頃は溫和しく勉强する。勿論他の人は自分が其人々を款待すと同じく自分に向て實義を盡す樣になつた。

又曾て自分が敬意を缺いだ人々を憶出し、一々其人々に謝言をして我が心を休めばやと思ひ、不計考へると、直き近所の一婦人を其朋友の面前で嘲諷ひ其人終に怒りて自分と交を絕ちし事が浮び、自分ながら由なき事をしてけりと今更後悔し、叮嚀反覆して自分の過失を陳謝せし手紙を送ると、其婦人は立腹の躰もなく却て自身の疎忽を責め更に自分を咎めぬ慇懃を極めたる返事を爲し、自分は嬉しさに堪り兼て其手紙を顏に當てゝ泣頽れ、此時初めてセルギイが曾て他の爲に生存するが人間の至大なる幸福だと云つた言葉の眞味を了解し、最早交際社會や漫遊旅行を夢みる事はなく、無私無慾、愛念、平和、幸福等で充滿し、律呂妙に循行する天道を樂しむ田舍の氣樂なる詫住居が好ましかつた。

家政

人は、一小天地なり、
家は、一小政府なり。

五才の本實　のぶ子

先月下旬、私かたを訪はれた珍客は、內海夫人とて、十一年前私が北海道で知己になつた友だちで、其ころはまだ女學校に修學中の人でした。其時函館に避暑中、偶然紹介された人で、僅か一ヶ月そこ〳〵の交際故、親しみはさまでに深き譯はない筈の所を、私は殊さら此婦人を永く記臆する由緣があつたのでした。何かとなれば、私が先年失ふた無二の朋友と、此婦人との、いかにもよく似玉ふとで、常年の夏中も、逢ふ度每、聲を聞くにつけ、様姿振りを見るにつけ、死が其姿をかくし遂た昔しの友を思ひ起し升て、さては、なき友の形見を、新たなる友に見る悦びを得たのでした。

流るゝ年月、變る身の上などが妨げて、久しく互ひに音づれさへ打絶へ升たが、懐しさは變るとなく、逢ふての親みは、多年の朋友に異ならず、北海の砂に濱梨子をちぎり、手を提へて五稜閣に古戰場を探ねた一と昔しを、宛がらきのふの如くに物語り升た。

さうして、おかたづきになつたのは？

七年まへですよ、ホラ、此兒が滿五才になり升もの、

ほんとうに、可愛いゝお兒ですと！

セイラ、スートの着つけ勇ましく、笑らへば笑くぼ入の口元に、味噌ッ齒あどけなく出したるは、誰が見ても、頭を撫でたさうな男の兒でした。それより、互の家族について、問つ問れつ、閑話に時を移し升たが、夫人は、急に思ひついた様子に、

アノ、孤女院は、此御近所ですか？、よつて行度のですから。

其方角を細かく指示し升たらば、夫人が、

實は、此兒が、孤兒院の話しを一寸聞き込んで來て、私にいろ〳〵尋ね升から、おまへの様に、とうさまも、かあさまも、家も、何も、あるのでない、哀れな子供の居る處で、みんなが、少しづゝ、お金や、着物なにか遣ると、深切な

かた〳〵が、それをもつて、兩親の代りに、可愛がつて育てゝ下さるんだといつて、聞せ升たのですよ。子供心に、母の敎訓を受て、感心し、其時分、小綴の本を賣て幾割か貰ふ話しの有つたを幸ひ、早速少し計り引うけ、賣た儲が今ま十八錢あるといふ事でした。母御は、嬉しげに其話を續けて

私が、一番さきに買はせられ升たよ、それに、雪のある中を、包を下げて、ズン〳〵歩るきますんですもの。子供ですから、遠慮も、容捨も有りはしません、人と見れば、サア買つてと勸め升んですよ、儲けて何にするんだつて、きかれ升のさ。スルト、孤兒院へ寄附するんですツて、大威張りなんですよ。ホ、、、併し、宗敎の本ですから、害になるとは有升まいよ。

私は前後の話に聞惚れて、庭をかけ廻つて遊ぶ彼の子供の姿を、目も離さず眺めて居り升たが、

ア、それで、孤女院へ、其お金を寄附なさるといふの。好いお子をお持ちなすつたよネ、そんなら、是非御一處によつて入つしやひ。

遠慮があつて、此時申されませんでしたが、私は、心の中に、此品德貞正な母があつてこそ、此兒があるので、若し我國に此通りな家庭敎育が一樣に行れたなら、實に〳〵憂ふる處は無いと、つく〳〵考がへ、暫らく言葉も出ませんでした。

○食物養分比較表

ふみ子

食物は其土地氣候及體質勞働の模樣等に依りて一定し難しと雖も先づ日本人として中等の生活作業を爲すもの、日常要すべき養分は左の標準に依るを可とすといふ。

蛋白質物（含窒素物） 一〇〇瓦（内消化分九〇瓦）

脂油 二〇瓦

含水炭素（可溶無窒素物） 四八〇瓦

但右蛋白質物の大凡三分の一は、動物質より來るを良しとす。若し植物質より求るとせば少しく其量を増すべし。今、日用食品中に就き其何質を何程宛含むかを識別し易からしむるが爲め左に其表を掲ぐべし、

（一）動物質食品

百分中	水分	含窒素物	脂油	可溶無窒素物	灰分
牡牛肉（肥）	五三、一	一六、八	二九、三	—	○、九
仝（中肥）	七三、〇	二一、〇	五、四	○、五	一、一
仝（瘠）	七六、四	二〇、七	一、七	—	一、二
牝牛肉（肥）	七一、〇	一九、九	七、七	○、四	一、一
仝（瘠）	七六、四	二〇、五	一、八	—	一、三
犢肉（肥）	七二、三	一八、九	七、四	○、一	一、三
仝（瘠）	七八、八	一九、九	○、八	—	—
羊肉（肥）	五三、三	一六、六	二八、六	○、五	○、九
仝（半肥）	七六、〇	一七、一	五、八	—	一、三
豕肉（肥）	四七、四	一四、五	三七、三	—	○、七
仝（瘠）	七二、六	二〇、三	六、八	—	一、一
馬肉	七三、六	二四、五	—	一、八	一、八
牛脂	一、三	○、四	九八、二	—	○、一
豕脂	○、七	○、三	九九、〇	—	—

兎肉(肥)	六六、九	二一、五	九、八	〇、二	一、二
雌雞肉(瘠)	七六、二	一九、七	一、四	一、三	一、四
仝(肥)	七〇、一	一八、五	九、三	一、二	〇、九
若雄雞(瘠)	七〇、〇	二三、三	三、二	二、五	一、〇
鵞肉(肥)	三八、〇	一五、九	四五、六	—	〇、五
鶩肉	七一、八	二〇、四	二、三	—	一、〇
鴨肉	七〇、八	二三、七	三、一	二、三	一、一
鳩肉	七五、一	二三、一	一、〇	〇、七	一、〇
燻肉(牛)	四七、七	二七、一	一五、四	—	九、八
燻肉(馬)	四九、二	三一、八	六、五	—	一二、五
燻豕肉	二八、〇	二四、〇	三六、五	一、五	一〇、〇
鹽豕肉	六二、六	二三、三	八、七	—	六、四
鷄卵	七三、七	一二、六	一二、一	〇、六	一、一
仝 白身	八五、五	一二、九	〇、三	〇、八	〇、六
仝 黄身	五一、〇	一六、一	三一、四	〇、五	一、〇
人乳	八七、四	二、三	三、八	六、二	
牛乳	八七、二	三、六	三、七	四、九	
山羊の乳	八五、七	四、三	四、八	四、五	
羊乳	八〇、八	六、五	六、九	四、九	
コンデンス(砂糖ヲ加ヘザル物)	五三、六	一四、六	一四、一	一五、四	
ミルク(砂糖ヲ加ヘタル物)	二五、四	一二、二	一〇、八	四九、四(乳糖一三、五 蔗糖三五、九)	二、二
鰛	七〇、三	二一、四	六、七	—	一、六
烏賊	七八、九	一九、一	〇、六	—	一、四
イセエビ	七六、三	二一、五	〇、四	—	一、八
蝦虎魚	七九、一	一八、四	〇、五	—	一、〇
鰊	一〇、九	六八、四	一三、九	—	二、九
魴鮄魚	七七、四	一八、一	三、三	—	六、二
泥鰌	七七、三	一八、四	二、七	—	一、六
鰈	七五、九	二一、九	〇、七	—	一、五
松魚	七二、七	二五、一	一、二	—	一、〇

田家のこよみ

杏勳子 編

○入梅六月十一日 ○螳螂生 ○腐草化螢 ○梅實黄

○六月一日より六月十日迄農事

○播種 桑子此季節より取りて直に蒔きてよし、

○移植 早稻植てよし、中稻、晩稻等本月下旬まで順次植付てよし、

○雜事 此季は日增暑氣に向ひ、漸く入梅に入らんさすれば、家畜飼養には殊に注意せざるへからず。鷄豚の飼料酸腐せしものを與へて下痢せしさきなどは、飼料の中へ硫黄の粉末を混入して與ふれば癒ゆべし、硫黄の得難ければ、木炭の粉末を混入して與ふべし、

○園藝法

第十三 截根法

春季果木の根を露出せしめ其一部を截除して後土を掩ひ、或は適宜の距離に於て其周圍の深さ一尺内外の溝を堀り、根は固より切斷し肥土を以て溝を埋め、且つ施肥して後土を被ふべし、此法を行ふに春秋を以て最も可さすさ雖ども夏季に行ふも妨なし、此法を行ふ時は一時養液に不足を生じて其結果力を增加し、次に無數の細根を生じて多量の養液を吸收するを以て、啻に結果の夥多なる而已ならず、果實も亦肥大にして且つ品位佳良なり。

第十四 果實の早熟を促す法

枝條の生長を制限して以て養液の多量を果實に輸送するの法を行ふさきは、其早熟を促し其果實の風味を佳良にし、且つ大に之を肥大ならしむるものなり、枝條の生長盛なるさきは殆ど全量の養液を奪去して果實の營養を損ずればなり、生長活潑なる果木に結べる果實の瘠小にして、生長の緩慢なるものに結べるもの肥大なるは則此理によれり、

枝條の生長を制限せんには、環狀に樹皮を剝奪すべし此法を行ふに適當なる季節は。開綻の季。若くは果粒豆大の時に於てすれば好結果を得べし。此法を行ふさきは果實の成熟を速にし、果大にして其風味佳良ならむ、蓋し剝皮を施すべき部分は其巾一分五厘乃至二分に超過せさるを要す、之れ則ち樹皮の癒合を速かならしめむか爲なり。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

雜錄

早起擷蔬遭雪沒、
遲眠補綻與燈親。

米國の下婢（下）

仕事の順序規律

是亦主家の定め方に依りて、多少の相違はありと雖も、概して毎週の仕事には順序あり。假令ば月曜日には其週間の洗濯を爲し、次の日には火熨斗をあて、又綻ろひものを爲し其次の日は料理、其次の日は家中の掃除を爲すなんどいへる如く凡そ一週每に定まり居る用事は、定まりたる日に於て爲す事となり居れば、日本に於る是迄の習慣の如く、每日同じ事をのみ繰返しく爲すといふが如き事はなきなり、故に仕事の運びも甚宜しく、下婢たるもの少しく心して働けば、隨分自分の爲に用ゆべき時間をば、繰合せ出すと甚自由なり、其代り若し怠惰なる下婢なる時は、何時も定まりたる日に定まりたる仕事を終ろを得ず、而も亦細君は日本の細君の如く、手當り次第に下婢の仕事を助け與ろゝといふが如きは甚少きを以て、下婢は何時迄も立働らきを爲し居らざるを得ず、是自然の數にして免れ難き事なれば、下婢も亦豫め此覺悟を有せざるを得す。斯く仕事には規律あり、下婢には責任を負はさるゝを以て自然用事のはかどりも能く、主家と下婢と双ながらの便益となるなり。

朝起幷に就寢

とも是亦各家異なれ共、其家々に依りて定められたる時間に起出、就寢の時間后は不時の事情差起りたるに非るよりは、主婦より何事も命ぜぬ定めなり又

下婢の部屋

として如何なる家にても必一室は與へ與ろゝ慣例なれば、就眠の時間后は、下婢は此部屋に入りて、翌朝定めの時間迄は他に出る必用はあらず。

下婢の休日

は每週必一日宛は與へらるゝなり。信者の家にては、勿論日曜日を以て休日に宛つるとなれども、不信者の家にありては、日曜は却て來客等あり、差障り多きとなれば、他の日を以て之れに宛てらるゝ事あり。此日は午前の內若くは前日にありて其手廻しを爲し置き、終日の食事等には差支へなきやうになして、然る后外出するとも、或は又主家に在りて自用を爲すとも其は自分の都合次第になす事なり。

下婢の食物

是亦日本に於る或る地方なごの如く、主人との間に相違する所あらしむるが如き事はなく、主人と同樣のものを食するとなり。されば日々の献立（こんだて）にも、下婢なればとて其數に漏るゝといふが如き事はなく、主人同樣一人前の頭數に入れらるゝなり。

此他尙ほ述ぶべき事もあらむなれど、之れを要するに、米國の下婢は日本の下婢よりも責任を負はせらるゝと重く、其代りに主人よりも亦一人前の人間として遇せらるゝ事あるなり。されど米國に於る日本人の信用は、近頃大に地に墜ち、殆んど支那人と同樣の輕蔑を受くるやうになり居るとなれば、日本人として米國に至り下婢たらむと欲するの人は、豫め此邊をば覺悟すべきとなり、而して又米國人一般の氣として實に自主獨立を尊び、勤勉の氣象旺んなれば、通常の日本人にては迚も米國人の意に適するほどの働らきは爲し難きなり。故に日本に在りて下婢を爲すよりは、尙ほ幾層の勞働を爲す積りならでは、到底米國の下婢とは成り難し。其洗濯といふも掃除といふも、日本の如き疎漏なるとにては濟まず、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

其洗濯の如きも白きものは能く迄も純白にせざるべからず、又一週に一回は殆んど日本のすゝ掃きの如き大掃除を爲すなど其勞働は實に容易のとにはあらざるなり。故に日本より至りて下婢を爲し居るものゝ多くは、其勞働の烈しきと、主婦が叱咤の嚴なるとの其二事に堪へ兼れて往々年月を保つと克はざるなり。故に日本より米國に至りて下婢を爲さむとするものは、其仕事に慣れず又其言語にも餘り能く通ぜざる內は、豫め其事を主家に告げ置き、始めは其給料を成るべく少くし、仕事に慣るゝに隨ひ漸次其給料を增し貰ふべきの約束を爲し置くを可とす。然らざれば迚も其勞働に堪へ得らるまじきなり。給料だに低廉なれば事務に不慣を承知にて雇ひ吳るゝ家も隨分あり。又洋の東西に拘らす、凡ての人情なるものは同一なれは、假令仕事には慣れずとも、忠實を專らとなし居る時は、必しも其排斥を蒙らざるなり。是日本の勞働者が聲價を貶し居る今日の塲合に在りては、特に切要なる事ならむ。尙ほ終りに臨んで一言すべき事あり。即ち下婢として極々平民的の需用品に甘んじ力めて其小使金を節約する事とせば、毎月の費用凡そ一弗以上二弗ほどにて事足るべし。尤是れは衣類に要する所の費を除き、單に止むを得ざる洗濯代、又は郵便代、紙、筆、料等普通の費用のみに就ていふとなれど衣服の如きは素より下婢として勞働するものが、分に過たる裝飾を爲すべきの必要もなければ、自分の覺悟次第にて何程をも要せざるべし。然れば一ヶ月十弗以上廿弗以內の給料中にて、七八弗乃至十弗以上をも貯蓄するとは左迄六かしき事に非ず。現に此談話をなせる某婦人は、十五弗の給料中にて、平均一ヶ月十弗宛を餘せりといふ。

以上は桑港に於ける實歷なり。文中單に米國と記せしは便宜に依りてなり。讀者其心してよ。

隱士小經綸

(一)肴屋の方々に告げ參らす。依然舊きを墨守して、魚類のみ、擔ぎ廻るは、いとも惜しきとなり。今日、牛肉を買はん爲には、わざ〳〵お三を走らしめ、權助を足勞せしめざる可らず、不便極まるとならずや。何處の細君方も贊成ならんと信ずれば、肴屋諸君が、魚類と共に、牛肉類を擔ぎ來らんとを要む。但し中には舊弊のお方もあるへし、判然、入れ物を別にし、わざと手を能く洗ひ、此と彼とを混ぜざるの用意もとより肝要なり。

笑ひ草

禁酒家、友人に、

實に、君にとつて大敵なのは、酒ですナ。

友人、

併し、宗教の方では、敵を愛す樣にと命じて有るじやア、ありませんか?

禁酒家、

さやうさ、併し敵を飲めとは、して有ませんナ。

敎師

今から四百年まへにどふいふことが有升た?

生徒

存じません、私はたつた八歲です。

またある時、同じ敎師他の生徒に、

温柔な德で名高い人を知つて居升か?

先生男ならモーゼスといふ人です。

女なら誰ですか?

先生、やさしい女なんて有リヤしません。

時論

片々

○男女高等師範學校を合併すべし

教育上にも、經費上にも、此合併を行ふべき理由あり。然るに、今日此冗務の下に、寧ろ事業の繁雜を媒介するは、恐らく人の爲に官を設くるの情實積弊之が重なる緣因を爲すとなきか（大日本教育新聞五月十三日）

○何故に高等女學校敎員は恩給を受るを得ざる乎

夫れ高等女學校教員たるに已に一定の資格あり、而かも現今の規制に於て他の師範學校及び中學校敎員たるに差異なくして獨り其待遇上此の懸隔あるは何ぞや。（同前五月十一日）

○一時の混雜に避易す可らず

元來日本の女子は蟄居主義の下に養はれ、常に家内に蟄伏して從順を是れ德とし、交際とては唯僅かに一家親類の間に時に往來することあるのみにして、敎育と云へば一に父母其人等に從順にして唯命是れ奉ずべきを敎ゆるのみ、曾て智識を開發せしむるの教育をも與へざれば、世間の事情をも與聞することをも得せしめず、酷評すれば、活ける人間として取扱はずして、一種の機械として遇したるなり、然るに今此女子を開放して世間の交際をも許し、又は學校に入れて文明自由の空氣を呼吸せしめ、學理の一端にても窺はしむるに於ては是れ即ち女子社會の革命にして、其の趨きは恰も鎖國主義を變じて外國交際を開き、樞理自由の何物たるを知らざる人民に敎ゆるに此新主義を以てしたるに異らず、一時多少の混雜は免るべからざるなり、即ち生意氣なりとか、お覡婆なりとか、不品行なりとか、女學校の評判の常に面白からざるものある所以にして、保守臭味の論者は得たり賢しと烏張夸大の筆を弄し、之を口實として西洋主義排斥の雲を起さんとし、前途を洞見するの明なき近眼者は目下一時の小混雜に心を亂して女學其物の進路を遮らんとするに至りしは歎ずべきにあらずや、一家内に蟄居して器械的の動作を爲す、是れ豈に女子の天命ならんや、文明の風潮は既に國の蟄居主義を押し流し、壓制卑屈の舊習を吹き飛ばしたり、焉んぞ女子のみ獨り蟄居、卑屈無智の舊天地に跼蹐するを容さんや、左れは事の大勢は既に定まり居るなり、何を若んで、彼の迂儒の輩が天下の大勢を知らず、樞理自由論に伴へる一時の弊に避易して倉皇儒教主義の再興を計りたるの愚に倣ひ、女子敎育に伴へる一時の不評判に避易して女子敎育其物を嫉視するの愚を爲さんや、況んや、女學校の不評判は針小棒大の浮說なるおや、尙ほ況んや女學生の所謂生意氣なるものは女子敎育の弊にあらずして、女子敎育の普れからざるより生ずるの弊なるをや（朝野新聞四月廿三日）。

○米澤鷹山公の廢娼論

米澤領に赤湯村と云へる處あり、古より公然娼妓を置き土俗之を鍋と稱す、之が爲め近村の人民幷びに藩士中色に溺れて放蕩に流れ甚だしきは産を傾け家を亡ぼすもの甚だ多く、藩士に在りては其の父兄の領地赤湯村近傍に在るを幸ひ、年貢を先納せしめ悉く之を浪費し去り一家飢渴に逼る等の奇談も少なからざるより、公は斷然之を廢するの利なるを信じ寛政七年十一月左の禁令を發したり

赤湯村に於ては古來よりナベと唱へて客取扱の女抱置き候儀免し置かれ候處人を溺らし傷れ候間今度被停候事

但抱置候女共十二月限暇出し受け拂ひ相極め可申候

是より先き治廣公江戶に在りしを以て、公此議を決し執政より其旨を具狀せしむ（公は此時旣に致仕せし故なり）江戶家老竹股厚綱之に異議を唱へ附箋して却送す、其論の大要に曰く

申越の旨一應御尤の儀と存候、去り乍ら古來より有來り候遊所を御制禁有之ては彼處には利あるも此處に害なる處可有之歟、如何可有之哉、抑々賢女に溺るゝ程のものは假令ひ御制禁御坐候共、其淫慾の堪へ難きに至ては人の妻妾を姦

淫する事にも及ぶべし、且つは方々に於て忍び〳〵に淫を鬻き候者出來まじきにも無之候、左候ときは一方の害を防がんとして數方の害を增し可申、是を制止せんとて嚴刻の御詮義御坐候はゞ罪人不斷たるべく候、古來より都會の境には寬容して差置かれ候者な、我國に於て卒然と嚴禁御坐候はゞ人情如何可有之哉、江戶は吉原其外驛場は格別、其他の遊所は御制禁の由に候得共オカ場所とやら申唱へ候遊里の數擧て數ふ可らず、(下略)

厚綱の存娼論は斯の如くにして、之に太宰春臺の經濟錄中存娼論に係る分を抄錄して參考とし米澤に却送したり、公は一覽の後自ら筆を執り反對の意見を公にしたり即ち左の如し、

丈を以て尺を計り尺を以て寸を計り候ては其度を得られざるものに候、先逹て赤湯の賣女禁止の事江戶表へ相達し候處、竹太夫(厚綱)春臺の論を以て申聞られ候、春臺の論は元より帝都王城大都會の上を以て論ぜられしことにて、實に左も可有之候、是を以て一國一城下の上に施し候は所謂丈を以て尺を計り尺を以て寸を計るにて候、方今赤湯の事は元より無賴遊惰の民を庇する場にも足らざる儀、又國都繁華の益にも相成るに足らず、一國の金銀融通するの利にも及ばざることに候、(此段厚綱の引用せし春臺の言に反對したるものと知るべし)唯々近村の農民を遊惰に導き都下の少年を淫逸に誘ひ候而已にして其害深く其利全く無之事に候、况んや近年は諸士の內にも彼の娼家業を營み候輩有之由聞くに忍びざる事も有之候、彼に溺れ候程の者は假令ひ制禁有之とも淫奔の慾に堪へ難くてイッシカ人の妻妾を犯し候事に至るまじきものにも無之との論、是又諸國輻湊の都會覊客の上の事にて候、面々其國に居て室家を具へ候上にては左樣には無之事、もし彌彼に溺れ候者の慾情を散し候一助ともなすと申事に候はゞ中々赤湯如き區々たる遊里を以て一國の慾情を防ぎ候に足るべき事にも無之候、近くは仙臺會津に於て遊里無之を以て相知れ候事に候、其外淫を鬻き候徒の出ましきとにもあるまじきなど皆是れ當時江戶表にて此の御制禁の行屆き兼候趣見聞よりして其論も相立ち候事と存候へば是又則ち丈を以て尺を計り尺を以て寸を計るにて候、今日の上を以て相考へ候ては此禁令は尤以て立易かるべしと存候、返す〳〵も害のみありて其利相見へず候間早く禁止候樣猶又評議有之候已上

是れ實に公の廢娼論なり、其の淫慾を洩らすが爲めに遊里を置くものとせば僅々たる一箇處の遊里豈全國の淫慾を洩らすに足らんやと云へる議論の如きは何ぞ近年各地にて唱ふる所の廢娼論に酷肖せる所あるや、公の此議論再び江戶に出て、治廣公始め皆な其說に服し遂に禁令を發するに至りしなりと云ふ、蓋し公は何事によらず壓抑して人の口を塞ぐことを嫌ふ甚だし、是を以て臣下より出づる議論と雖も一概に之を排斥し去らず、丁寧反覆利害を研究して然る後利なる者を擇んで之を行ふ、廢娼論偶々以て公の平生を知るに足るべきなり(朝野新聞五月九日)

〇おしろい分析表(一)

右は水野虎吉氏の調査に係り、婦人衛生會雜誌第四十二號より轉載せしものなり。

名稱	水分%	鹽基性炭酸鉛%	殿粉及香料%
製造人	京橋區銀座一丁目		字の丸甚五郎
〇よわひの菊	一二、一八八	二一、五二五	六六、二八七
〇加茂川白粉	九、四七六	二四、九六〇	六四、五六四
〇花廻雪	三、三一二	三八、二三九	五八、四九九
〇金化粧	六、四八一	五三、一〇四	四〇、四一五
製造人	東京		盛田某
〇雪すゞめ	九、六四七	三一、六三九	五八、七一四
製造人	日本橋區よし町		林啓熊
〇きくさうおしろい	九、五三四	二三、七六四	六六、七〇二
製造人	本郷二丁目		かれやす
〇薄化粧牡丹香	一〇、二二一	二四、七七一	六五、〇〇八
〇つや錦	四、九三八	六三、八〇八	三一、二五四
製造人	京橋區尾張町一丁目白牡丹本舗		松田幸次郎
〇白牡丹	四、二八〇	五、〇七〇	九〇、六五〇
〇富士みがた	七、四二一	四三、三三〇	四九、二四九
〇金けしやう	六、六二八	四八、七九二	四四、五八〇
〇富香貴	一、九三七	七〇、五一一	二七、五五二
〇若まつかう	三、七九七	一、八一一	二四、三九二
〇むつの花	〇、六二〇	八七、八四〇	一一、五四〇
〇パッチリ	〇、四七二	九五、一二〇 澱粉ナシ	四、四〇八
製造人	京橋區南傳馬町三丁目		坂本友七
〇美艶仙女香	一一、二九一	二二、四五九	六六、二五〇
製造人	仝常盤町		起久堂福島春伯
〇顔のくすり菊堂散	一三、九四三	一、四二三	八六、六三四
製造人	東京日本橋區本兩替町 京都四條柳馬場東入町		下村山城椽
〇御匂入うすけしやう	七、六二八	二六、一五三	六六、二一九
〇丁子御白粉	四、五三二	五八、一〇八	三七、三六〇
〇匂入金けしやう 薄紅梅御白粉	三、八八〇	六九、一四四	二六、九七六
〇大清御上り 御丁子香白粉	三、九七五	六九、二七〇	二六、七五五

通信

淡海子編

●福島縣通信

◎幼稚園　先月四日若松甲賀町に開園したる私立若松幼稚園は、地方の信認日を追ふて厚きを加へ入園を申込むもの續々起り、目下園兒の數三十四五名となり主任者海老名倫子の外二名の助手ありてます〳〵好都合に赴く樣なりといふ、

◎女教師の服制　福島小學校の女教師は先頃より一同誓約の上服制を設け之が監督を同校長に申出でたるよしにて、其主意は物事の華美に流るゝよりして、小學生徒に至るまで被服の美を楽むの餘り、分に過るの裝を爲すの傾向あるを矯正するにありて、互に質素を守りて兒童に示すものなりといふ、而して其服制は通常服は木綿とし、羽織は必ずしも此限にあらずとし、禮服は黑木綿の紋付を正服とし、正服を用ゐ難き時は木綿着物に黑木綿の紋付羽織を着することなりといふ、方法の是非は別問題として其精神は頗る感ずべきことなり、知らず實行上如何なる結果を呈するやを、

◎育兒會　の主任熱心家瓜生岩女は先頃より會津地方に出張して、之が擴張を計り居れり其執る所の方針は孤兒若くは貧兒を養育するため、此等の兒を適當の家に托し有志家の寄附金を其養育費として、其家に配賦するにありて贊成の有志家も多しと聞く、

●三重縣通信

◎津市幼稚園　は三重縣私立幼稚園の改良したるものにて今般津市女學校と共に丸の内に開きぬ、從來入園者は官吏又は紳商の兒女多きを占むる傾きありしが、今般規則を改正し組織を變更したるにより、中等以下の社會の兒女にして入園を願出ずるもの頗に多きを加へたり、今其規則の要項を摘載せんに幼兒は太約三年以上六年未滿にして、種痘若くは天然痘濟の者、保育料は一ヶ月二十五錢、

◎津市女學校養蠶飼育法傳習、津市女學校に於ては正科以外に養蠶飼育傳習科を設け、昨今實地飼育を傳習し居れり、

◎孝女登勢子の碑　は當市有志者菊澤氏等の發起にて、津市公園内に建設することなり、爾來工事に着手中の處、此頃に至り大抵出來せしを以て、いよ〳〵近日中に建碑式を行ふよし、

◎國民禁酒會　過般來會員募集中なりし禁酒會は追々會員の申込もありて、已に五十余名の多きに至りしかば、去る七日万町報恩寺に於て總會を開き、會頭一名幹事二名を選擧せしに、會頭には池永駒太郎、幹事には關時晴、横田健藏、の兩氏當選茶菓の懇親會を開きて散會しぬ、當日は「ガーヂナ」嬢も出席せり、因に云ふ目下同會員中には十數名の婦人あり、

●京都通信

◎松田道子氏　此度奬學金を受けて米國へ遊學せらるゝこととなりたる、松田道子氏は一先其從前勉學し居られたる、同志社女學校に立寄り、故舊と撮影などして、其故里宮津に歸省せられたる由

◎小松宮殿下の岡山孤兒參觀　同殿下は、佐野赤十字社長、花房宮内次官等を從へて、岡山孤兒院を參觀せられ、院内諸部御巡覽の上孤兒を本堂に會せしめ、唱歌などを求められ終に殿下より金十圓、佐野氏より金五圓を菓子代として殘して去られたる由

●正誤

前號の通信欄内に於て、鳥取縣通信と題し同地、山陰通信子の報道に係る、鳥取縣女子師範學校の出來事の一項を掲載せし處、今般同校より左の通正誤を通知せられたれば、文全を掲げ玆に正誤す、

貴社女學雜誌第三百四十四號通信欄内鳥取通信に係る鳥取縣女子師範學校の出來事と題する事項中栲問的取調をなせし如く記載あれとも是れ畢竟取調の際本人は已に不都合の所爲を犯せしにも拘らす兎角其中立曖昧にして其非を蔽はんとする等の狀況なれは取調上益困難を來さんの恐れありしか爲め遂に外出及書信の往復等を禁するの不得止に至りたるまてにして决して栲問樣不正の取調を爲したるにはあらす又文中或人校長云々又拒まれたりとの怨みを以て云々の如きは全く事實にあらす又其當時師範學校は德義上放らに本人の非行を世上に吹聽せさるまてにして敢て之を秘し其始末を明にせさるにあらす要するに本人は屢々不都合の所行を犯し到底教員たるへき人物にあらさるを以て逐校に處したる次第にて右通信中事實相違の廉不尠候に付此全文を掲け正誤相成度此段要求候也

明治廿六年五月十九日　鳥取縣尋常師範學校

女學雜誌社御中

女報

淡海子編

●皇后陛下御誕辰日

明廿八日は皇后陛下第四十四回の御辰誕日に相當するを以て、當日は皇太子殿下を初め奉り、各皇族大臣幷に宮内省高等官、及有爵者は參内祝賀を申上げ奉り、尚ほ女子高等師範學校高等女學校、東京府高等女學校女子職業學校等にては日曜日の休暇なるも職員生徒一仝出校し、御眞影捧禮式をなしたる上、唱歌を奏して君が代の千代八千代を祝し奉る由、而して宮内省よりは仝省官吏へ酒饌を賜はるといふ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●皇后陛下の養蠶　皇后陛下は御宮殿の中に養蠶所を設けさせ玉ひて、女官を相手に御手から桑を採り蠶を飼はせ玉ふに、天皇陛下も亦た御心を用ゐさせ玉ふこと斯くまで厚し、天の冥護、宏大なる聖恩の及ぶ所、我が實業の近時隆々として發達するもの偶然ならじ、

●東京慈惠醫院行啓　豫て仰せ出されたる如く、去十八日午後二時十五分皇后陛下には、東京芝慈惠醫院に行啓あらせられたり、院長高木兼寛氏以下幹事の人々いづれも門内に整列して奉迎す、次で院長御先導にて御休憩所に入御、便殿にて院長幹事役員に拜謁を賜はり、其れより各親王御息所扈從し奉つり、式場に臨御ある、院長慈惠院報告を捧呈し、次ぎに卒業生一同に卒業證書を授與し、看護婦實地演習醫員セーヤ氏ジャッケット實地用法を御覽ありて、卒業生一同に御菓子を賜はり、同三時三十分還啓遊ばされたり、扨卒業生の人名は左の如し

第八回卒業生　立花 瀧　岡本 孝　星 登與　山本 錄

第九回卒業生　石井 きよ　小林 みつ　東角井 愛　小久保 ふさ　(日々)

●貴婦人　各大臣の夫人令孃を初じめ、其他の貴婦人は去十八日午前十時より參内、皇后陛下の御機嫌を伺ひ奉りたり、

●横濱婦人慈善會　は本日開會せらるゝ由、

●農商務省蠶糸部の蠶況　王子西ヶ原なる同省所轄蠶糸部の支那蠶兒中早きは昨日上簇したるが其結果は至て好良なりと、而して日本蠶は早きは三眠遲きは二眠なるが、其景況も至て宜しき方なりと云ふ、因に記す昨今の氣候は蠶業上に最も宜しからざるに付、當業者は大に心配し居るといふ、

●清國皇太后六旬萬壽慶典擧行ノ費用　明年慈禧皇太后六旬ノ萬壽慶典擧行ニ附キ目下盛ニ準備中ナルガ、北京戸部ハ右ニ關スル經費ヲ籌備スルノ責任アリ、而シテ現ニ湊集シ得タル備用銀ハ既ニ五六百万兩ニ上リタル由ナリ、曩ニ乾隆帝萬壽慶典ニ於テハ、銀三千六百万兩ヲ費シタルガ、今回ハ非常ニ節儉ヲ加ヘ其三分ノ一ヲ以テ執行スルノ豫定ト云フ(五月廿日官報)

●幼稚園生徒の減少　府下各所の幼稚園生徒は、一昨年昨年に比すれば本年は案外減少せるより、其の原因を取調べしに退園せし生徒は多くは官吏の兒童にして月給十分の一の献納にも至りしものと見へ其影響十分の一なりと云ふ

●眞宗婦人教會　去十七日築地本願寺蓮華殿にて發會式を擧行せしに、來會者八百餘名に達したりと、

●三一會舘のバザー　築地居留地外國婦人諸氏の發起にて、去る六日午後三一會舘に於て諸氏が手製に係る諸品を陳列販賣せられたりしに、其揚金三分の二は孤女學院に、餘の一分は教會に寄附せられたり、當日尤も客人の注意を引きしは孤女學院製造の毛糸細工造花等の諸品なりし、是は孤女の造りたるもにて四十餘圓の賣揚金ありしと聞きぬ(信仰の友)

●小學兒童躾方の一新法　長崎高等小學校及び高等女學校にては、この程より各生徒をして交互教場内外の掃除に服せしめ敷板の如きも日々雜巾にて之を拭ひ一切靴及び上草履を禁ずる事となしたる由なるが、當分は教師自ら之を實行して、漸次各生徒に及ぼす筈なりといへり

●高等女學校設置　栃木縣に於ては從來尋常中學校内に女子高等普通學科を設置せしが、去月一日之を分離し高等女學校に改定せり、

●謹で妻君の怒に觸るゝ勿れ　女權高き米國にては間ま人をして奇異の感に勝えざらしむるものあり、此程同國オハヨー州の州會下議院にて姦通刑法に一の罰則を附加することを議したるとあり、其の注文は凡そ有婦の夫にして自から獨身者と號し、他の無夫の女に接したるものは三百弗以下の罰金に處し、若くは六月以上二年以下の禁錮に處す有夫の婦にして、自から獨身者と稱し他の男子に接したるものも亦た同じといふに在りき、州會下議院にては多數を以て此法案を可決し直ちに之を州會上議院に回附したり、上議院の議員多くは耆老なり、其の老妻の爲めに汚點を添うるの罰法を議するを欲せざりしか、將た權力高き婦人の嬌嗔に觸れんことを怖れしか、婦女に對する罰法を否決し單に男子にのみ同法律を行ふことを可決せり、米國婦人何ぞ多幸なるや(郵便報知)

●津市女學校の養蠶飼育法傳習　津市女學校に於ては、正科以外養蠶飼育法傳習科を設け、昨今實地飼育法を教授し居れり、

●一怪報　一怪報あり長崎より來る、曰く米國警吏補フランクチウイルスなる者醜業を爲しむさる目的を以て未丁年の日本婦女を誘拐し、之れを海外に携へ去らんとし事發露して縛に就きたりと、曩きに長崎港に於て英國人の犬姦事件あり、今復た此怪聞を傳へ來る、而して其主動者の何國人なるを問へば、或は英國人或は米國人、共に是れ文明國を以て自ら許す先進國に非らずや、今斯く醜聞とし云へば多くは文明國民の擧動に出づとは抑も亦奇怪ならずや、嘗て佛のルーソーが非文明論を唱へたるも亦其故なきに非らざるなり(改進)

●女權雜誌主筆の詐欺事件　同雜誌主筆藤井ヨシが爲替切手の券面にある一圓を三十圓と變造し、天賞堂より金時計一個を騙取したる被告事件は、去る三日東京地方裁判所に於て公判を開廷し、即日結審有罪と決したる由、

●小笠原島女學の景況　東京府所轄小笠原島の學校及生徒の人員は、母島の中沖村尋常小學校には女生徒十四人、同村人口女二百三十六人、學齡四十七人、就學十四人、不就學女三十三人、同北村尋常小學校には、女生五人人口女百〇〇人、學齡女十八人、就學十人、不就學女十三人、父島中北村尋常小學校には、女生十四人、人口女二百六十二人、學齡女三十人、就學女十四人、不就學女十八人、同島羽村尋常小學校、女生十二人、人口女百七十八人、學齡二十人、就學十一人、不就學八人

●慈惠女學院大津元資積立講　同地の本派本願寺末寺下百石町慶善寺住職田口義門師外數名の僧侶は、大阪の慈惠女學院大津元資積立講と稱するものを起し、其初會を去廿四日阪本町交道館に於て開會せし由なるが、此講は富籤樣の組織にて一回一圓掛込にて、四百口となし當籤は甲乙の二樣ありて、金百三十五圓宛を渡す法なり、例せば金一圓掛込にて籤に當れば金百三拾五圓を得るの方法なり、而

して其剰餘金を以て孤兒の女子を養育教育する精神なりと、但し其出張所は右慶善寺なり、

●希臘の娼妓　歐洲諸文明國その十が八九迄娼妓を以て恰も穢多の如く、一種劣等の人類と看做し賤蔑至らざる所なしと雖も、獨り古代の希臘國に在りては然らず、娼妓は恰も貴族の如く社會上流の地位を占め、當時文學者は競ふて其傳を記し、今日に傳はるもの少からず、今其一二を擧げんにザルゲリヤと呼べる婦人は小亞細亞ミリウス府の娼妓なりしが波斯國王ゼルゼスが希臘に侵入せるとき、王其の才學を聞き之を用ひてゼッサリイ政府と商議せしめり、以て當時娼妓の地位の賤しからざりしを想像するを得べし、後此の娼妓はゼッサリイ王に嫁したりと云ふ、又アフパシヤと云ふ婦人はアゼン府に大娼閣を起し、婀娜娟妍たる美婦人を集め營業せしがアフパシヤは固と才學ある婦人なりしかば娼閣をして、專ら淫を鬻ぐの所となさず抱えの婦女及遊客の前に公然文學理學等の講義を傳へたるより、名聲四方に馳せ此家に遊ふの狎客は孰れも當時希臘社會の上流の位地を保つの人にてありしと云ふ、

●佐々城豐壽女史の消息　同女史は愈々去月廿八日横濱解纜の郵船にて、一昨々日小樽に着し此所よりは瀛車にて室蘭に向ふ旨報ありたる由なるが、同女史の一行は老母(七十三)長女(十六)次女(八)三女(三)の五人にて、同地迄從ひ行くの約束ありし子守女も出發の朝に至り俄に暇を請ひしを以て、今は手助けとなる者は長女信子一人なれば女史の困難は思ひ遣るさへ氣の毒なりと知人の物語り(自由)

●板垣伯と西村よね子　板垣伯が去二日但馬國出石郡出石町に到着したる夜なりとか、同國城崎郡湯島村の、西村よね子と云へるが態々出石(出石湯島の間六里)に來り伯の旅館なる玉泉樓に赴きて伯に面會を求たり、然るに隨行員は伯の疲勞を察し面會を謝絶したるに、よね子は中々に承知せず妾は先年伯洋行の當時より歸朝の頃まで東京に在りて伯を送迎し、又伯の主義を贊成し其後も岡山地方に於て自由主義の爲めに奔走盡力したるともありたれば、是非面會を許されたし然らざれば本夕は妾も當旅館に止宿し明朝面會を請はんと一寸も退く氣色なければ、已むなく伯に此旨を通したるに伯は直に面會して、凡そ一時間計談話したりとい

ふ、

●猶太婦人再び横濱に來る　一時横濱に評判高かりし、車夫淸水鐵五郎を殺害せし、墺國人シヲンベルケルの教唆者の嫌疑にて久しく入獄したる、猶太國婦人ピターは其後香港に身を避け居りしが、去る十二日再び横濱に來り扇町二丁目三十二番地洋酒店志田龜吉方に當分寄留し居れりと、

●海外密行醜業婦人　横濱居留地百廿四番館に寄留する岩崎セン(廿七)鈴木ナチ(廿一年)の兩人は同市元町三丁目九十八番地寫眞師戶田マサ其他の周旋にて去十二日横濱を出帆せし、加奈太郵船インプレス、オフ、インデヤ號にて醜業の目的を以て密かに米國へ渡航せんとせしを、早くも居留地警察署の探知する處となり、取押の上懇篤說諭して放免したり、

●英國女皇陛下の誕生日　去二十四日に相當するを以て、横濱居留地各外國銀行及英字新聞社は當日休業せり、

●郵便電信事務に女子の採用　郵便電信の事務に女子を採用することに付き、近時の佛字新聞は巴里に於て、一月二十三日、及び二十四日の兩日電話に從事する女技手凡そ六十名の採用試驗を擧行し、又同月三十一日に無慮三百名の試驗を行ひたる旨を揭げ、且つ其弊害の生ずるを嘆じて曰く、郵便電信兩事務に女子を採用するは益々流行する有樣なるが、其の男女雜居して執務するは將來種々の弊害を生ぜざるかと、吾人私かに此れを憂へしが果せるかな近時其の醜聞の余聲の耳朶に觸るもの往々にして一二に止らず、左に少しく其異色のものを揭げん

電信技手のつれに暇あるときは他局の知友と電信に由りて談話應答するは各國有勝ちの事なるが、夫れに付きて一條の物語あり、去る頃男技手の在勤せる地方局より、巴里の某局なる女技手の許に通信せしが、最初の程は唯日常の挨拶なりしが、次第に話は佳境に入り果は男の方より田舍訛にて心の程と其姿とを郵便にて送るも差支なきやと問合せしに、女の方よりは直に其差支なき旨と、又在勤地の名産なるクルート(菓子)とを併せて送られたきやう返信したり、斯くて日ならずして約束の如く書翰と菓子とは到達せしかば、女は聽て詰合ひの誰彼を呼び集へ其菓子を頒ちて試みに、其書翰を披き見れば其切なる情を細々と認めて、何れ其内に局長の許可を得て花の都に御身の月の顏を見んとぞ認めける、讀終りて一同は手を拍て一時の甘言能く菓子を欺き得たりとて、男技手の愚を嘲り笑ひければ其事四邊に傳播して今は郵政廳中誰知らぬ者もなしとぞ、本邦に於ても一昨年より電話交換或ひは電報の調査に、女子を採用し其の成績は大に見るべき所ありし其の執務間は同僚互に相通信するものあらず、且つ取締も頗る嚴重なれば如此ば爲あるまじけれども、姑く記して後車の戒となすのみ(東京日々)

外報

◎婦人會議　世界會議の婦人部は五月十五日より初むる由なるが同婦人會議は一定の教義或は主義等の下に集るにあらずして、寧ろ全世界にある諸般の婦人ある組織せる集會の代表者を一堂に會するにあり、たとへ集會の代表者にあらずとも若し婦人事業に關し經驗あるものなれば勿論同會議に列席するを得るなり、此の會議は必ず婦人の發達進步を代表するものたるべく、後來科學工藝等の熟練者の社交家政及び政治上の大勢力たる預表たるべきを信ず、而して合衆國の内婦人商議會は此の婦人會議を以て諸般の會議に先んじて開かしめんと力を盡せり、此の商議會の會頭は有名なるセウオル夫人にして書記はラケル、アベリー夫人なり、アベリー夫人は各國の婦人との通信を司り凡て質問等に答ふる事を爲せり此の兩夫人の外シカゴノ博士サラ、ステブンソン、ジュリアスミス兩女史、イバンストンのウヰラード孃、ハーバート孃は婦人會議の委員として本會に連れり、婦人會議は又シカゴのボッター、パルマー夫人、チャールス、ヘンローチン夫人兩氏の監督する處たり、此の兩夫人は即ち世界博覽會婦人部の總督をも爲せる人なり、願くは婦人會議成功あれ、望むらくは其日を記臆せよ本年五月十五日なり。

中等教育科用書

東京英和學校教授 松島剛著

近世中地理學

洋装美本 密畫、地圖及地圖描畫法數十枚入り

日本之部 上卷 二百六十頁 實價八拾五錢

外國之部 下卷 三百頁 實價八拾五錢

本書日本之部ハ廣ク公立諸學校ニ採用セラレ又實業家ノ好參考書トシテ世間ノ稱贊ヲ得タリシガ今般發行セル外國之部モ近世地理學ノ著者松嶋先生ガ弘ク群書ヲ渉獵シ深ク中外ノ形勢ヲ觀察シ多年ノ刻苦熟案ニ成リシ者ニシテ近隣諸國、南洋諸島、濠洲ハ勿論歐米諸國ノ地勢、民情、産物、交通、貿易、軍備等ノ要項ハ擧テ漏ラサズ殊ニ内外ノ位置、交通、及貿易上ノ關係ノ如キハ一々之ヲ縷述シテ彼レ此レ相照應セシメ讀者ヲシテ知ラス識ラズ海外列國ノ盛衰、及本邦トノ關係、趨勢ヲ解讀セシムルノ妙アリ工業、貿易及殖民ノ將ニ盛ナラントスルノ今日ニ當リ此書ノ出ツル豈偶然ナランヤ

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番 春陽堂 (電話五十一番)

久津見息忠君著

耶蘇教衝突論

○全壹冊定價金十六錢郵税金二錢
○五月五日發賣

右ハ、多年名ヲ潜メテ、專哲學ヲ研究シタル、蕨村居士、久津見息忠氏ノ著ス所。井上博士ノ説ニ對シテ、教育ト耶蘇教トノ關係、耶蘇教ノ利害等ヲ論ジタル者。所見卓抜、條理明晰。居士ガ、懷抱セル理想ヲ詳悉シテ、痛快ナル斷定ヲ下シタリ、宗教家、教育家ハ、必一讀セザルベカラズ

發賣所 女學雜誌社 東京麹町下六番町

大取次 ◉警醒社 ◉東京堂 ◉東海堂

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

巖本善治君講述

教育學講義

正價金八錢
郵稅金貳錢

右は君が、明治女學校、高等科女生に口授せられたる講義中、之を筆記して、昨年七月より本年四月に至る、白表女學雜誌附錄として、續載せしものにして、先頃より之を一册子として世に公にせよと請はるゝ者あれば。謂ば君の未定稿なれど、今般廉價を以て同好諸君の求めに應せむとす、

發行所　東京麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

皇后陛下御覽　三島通良君著

四版

はゝのつとめ

和本上製上下二冊揃　定價金五拾錢　郵稅金六錢

◎醫科大學產科◎婦人科◎小兒科◎華族女學校◎長崎◎福岡◎島根◎秋田其他數縣尋常師範學校敎科及參考書

右は第三版賣切の所、今般第四版印刷成りたれば一層直段を引下候間續々御購讀奉願候。

東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社

第九號

立憲改進黨

黨報

五月廿日發行

◉論說△對韓策……尾崎行雄△近事の外交問題……內外子△大に司法制度を改革すべし……鹽入太輔◉演說△過去の事蹟未來の希望……島田三郎◉雜錄△故小野梓君の傳△故沼間守一君の傳△水師都督ホラチオ、ネルソンの畧傳◉黨報△懇親會△東海遊說員△柵瀨軍之佐氏△大隈英麿氏鄉里に赴かる△箕浦勝人氏の中央線路視察△甲州各地の演說及懇親會△埼玉縣改進派大會△横濱の政談演說會△沼間氏四周年紀念會△十三州臨時大會△山梨縣に於ける改進黨△靜岡縣の改進黨△東葛飾郡の演說會△嶋田孝之氏の當選◉時事△改革の豫報△野村公使の免官△法典主查委員の分任△東京辯護士會長選擧の競爭△特別市制廢止運動△川上中將の大陸行△朝鮮王の敕諭△大石公使京城を引揚けんとす△朝鮮政府の顧問△對淸要償問題△ブラジルの使節△狩獵規則施行の結果△國民對自由△催促すべきもの△重要の外報數件◉官報△出版法及版權法（一部代金六錢）

東京々橋區築地二丁目十四番地
立憲改進黨　報黨局

大賣捌　巖々堂

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本多錦吉郎先生著幷畫

再版

圖解 庭造法

正價一圓五十錢　府外遞送料　三十錢

石版密畫二十六圖圖解一册ヲ添ラ一帙トス
帙ノ丈一尺二寸五分幅九寸庭園構造ノ方法ヲ說明ス啻ニ實用
ノミナラズ机上ノ清翫ニモ適ス可キ雅容紳士必用ノ圖書ナリ

本多錦吉郎先生著幷畫

本多錦吉郎先生著幷畫

茶道要訣 茶室圖解

着色圖解說書　合一冊　近刻

右ハ茶室一切ノ設計搆造ヲ鮮麗詳密ナル着色圖畫ニ寫シ茶庭ノ規摸ヨリ待合中潛リ其他之レニ附帶ノ建築上ノ諸圖及ヒ有名ノ茶室ノ圖數種ヲ擧ケ解說ニハ茶室茶庭ニ關スル諸般ノ事柄ヲ記シ且ツ其搆造寸方ヲ懇篤精細ニ詳述セル近時ノ一新奇書ナリ世ニ茶道ヲ嗜ムノ士女ハ勿論工匠ニモ益スヘシ又坐右賞翫ノ資ニモ供スヘシ江湖風雅ノ道ニ心ヲ依スルノ士女一本ヲ購ヒ昌平ノ澤ヲ樂ムノ一贊ニ供シ賜ヘ

本多錦吉郎先生著

本多錦吉郎先生著

畫學類纂

全六冊　正價六十三錢

第一編	禮氏繪事辯上	正價十三錢　郵稅二錢
第二編	仝　下	正價十錢　郵稅二錢
第三編	油繪山水繪	正價十錢　郵稅二錢
第四編	形像原則	正價十錢　郵稅二錢
第五編	人躰解剖篇	正價十錢　郵稅二錢
第六編	繪事三要	正價十錢　郵稅二錢

東京繪畫學校編輯

通信 畫學講義

第二號五月四日發行
壹部　定價金十　錢
郵稅　壹部二　錢

此書は現今の畫伯たる瀧和亭小林清親幷に同校諸先生が常に生徒に敎授せん爲め畫法を說明し或は臨本を揮毫せられたるものを編輯し斯道に志あるものを導かんとす但し講義錄の課目は運筆。臨寫。摸寫。(以上臨畫を挿入す)寫生。作圖。(以上問題を挿入す) 用器畫(挿圖)とし普通敎育畫學科の參考及ひ獨修者の便に供せんとす大方の諸君速に一本を購求し畫學の階梯とせらるへし繪具製法をも記載す(水繪具)

平塚定二郎先生講述

獨逸文法階梯說明

正價五十五錢
郵稅　六　錢

方今獨逸學ノ我邦ニ駸々乎トソ益旺盛ニナルハ獨逸學ノ我國ノ事物ニ適當スルヿ多クシテ學理ノ明確ナルカ故ナリ然レ𪜈殊ニ獨逸文法ハ泰西諸國ノ文法中最モ至難ナル者ニシテ初步ノ困難ナルハ言ヲ俟タス故ニ學者往々細密ニ通曉スルニ困ム在來ノ文法書夥多アリト雖モ大概皆ナ直譯タルニ過キズ本書ハ本ト自著ノ獨逸協會出版ニ係ル獨逸文法階梯ノ說明ニシテ自家ノ生徒ニ敎授スルノ際每ニ之ヲ筆記シ歲月荏苒積テ一卷ト爲セシモノナレハ頗ル懇篤周到煩雜ニ涉ラス所謂簡ニシテ明ナリ況ンヤ其解說ハ悉ク直譯ヲ載セ邦語ヲ以テ意義ヲ說明シタルモノナレハ初學者ノ綴字ニ熟セサルノ徒モ尙ホ之ヲ解スルヿヲ得ヘシ殊ニ晚學日子ノ餘裕ナキ者ノ如キハ斯書ニ就テ學ヘハ殆ント先生ト親炙スルニ異ラス實ニ文法ヲ學フノ便益未タ此書ノ右ニ出ツル者アラス

發行所　東京神田雉子町　團々社書店　(電話百四十八番)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

禁酒矯風

毎月一回發兌
定價一部金貳錢
市外郵稅五厘

●第二號目次●

○論説●先づ官吏の風儀を矯正すべし（李門生）●嗚呼日本國は果して何と命名せん（瀧松陽）●婦人白標軍の遠征（佐々城豊壽女）●禁酒主義の實行（武部喜代藏）

○彙報●陸奥外務の禁酒●ビスマーク公逸事●海外雜事●盲唖生●禁烟

○落葉●林子平氏の箴言●今様（高宮操）●和歌（正美）

○小説●肇さだめ（無名氏）

○廣告●數件

○本誌ハ宗教に偏せず政黨に僻せず整然獨歩して飲酒の悪霧と社會の濁浪を跳て國本鞏固國光發輝の正明安樂國に徂徉するものなり

發行所 鳥取縣鳥取市東町百六十二番地 禁酒矯風發行所

小崎弘道著

基督教と國家
附録 眞正なる宗教の必要

（定價六錢）

目次○二種の國害論者●基督教迫害の來歷○基督教の國家及國王に對する教旨●基督教と歴史●基督教と國家●基督教と我國の將來

右は先きに數千部賣盡し久敷品切の處時勢の必用に迫り**今般再版す**

短篇小説

愛之杯

著者 エリザ、デー、テイラ
譯者 フエリス女學校教師 佐藤てつ子
定價三錢五厘
郵稅三冊迄二錢

本書は其主人公たる天使の如き一少年が一の小盃をもて丈夫の心膽を感激せしめたしと云ふ一條の美談にして之を讀む時は人をして覺へず同情涙に咽せばしむるものあり蓋此書の如き無害純眞なる短き物語にて普ねく家庭、日曜日學校の讀物に推薦して尤も適切と云ふべし

發行所 東京新橋出雲町一 警醒社書店

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

青山神學校教授山田寅之助氏纂譯

舊約聖書便覽

四六判百五十三頁
定價 並製拾五錢 上製二拾錢
郵稅 四錢

五月廿五日より發賣仕候

舊約聖書は新約聖書の先驅なり新舊約兩書は車の兩輪の如く鳥の兩翼の如し舊約は新約を得て初めて大成し新約は又た舊約によりて其意義を知る方今新約書の研究は多く之を怠らざるも舊約書に至りては傳道に從事せらるゝ人々と雖ども或は研究に粗なる弊あり况んや一般の信徒に於てをや然れども其然る所以も亦故なに非ず舊約書は其卷冊の浩瀚なるより容易に之を通讀するを得ざるも其一原因なれども邦語に於て舊約書の指針を與ふる書物なきと其主因たらずんばあらず此便覽は聊か以つて此缺乏を補はんとて著されたるものなり書籍の躰裁は巳に聖書の友雜誌附錄に於て讀者の了知せらるゝ所なり苟も聖書を眞實に研究せんと欲するものは新約書のみならず舊約書を幷讀むことを要す而して舊約書を讀むものは此便覽を座右を備へは敎師に就きて大躰の指敎を受くるの思あらん

發賣所 東京市京橋區彌左衞門町 聖書之友雜誌社

炭谷小梅女史編

藝者と手掛

正價 金三錢
郵稅 金二錢

右は、岡山孤兒院の創立者にして、石井十治氏の助け手たる、炭谷小梅ぬしの筆記せられしものなり。言々、通俗にして、一々實際を穿ち、着々急所を刺して、毫も遺憾なからしむ。宜なる哉、此人の傳道によりて、斷然、妾を止めたる人少なからぬことや。凡そ、此の雜誌を讀まんほどの人にて、此開書を寄せらる可き輩は、固く信ず、決して一人もあらじ。左れど藝妾にすゝめて其業を止めしめんと心掛る人は、極めて澤山なるべし。然るに、かゝる人は思ひ高潔に過て、反つて藝妾の情を知らず、其訓戒兎角に要緊を得ざることあるもの也。左れば、かゝる人にして、若し此の一文章を讀まば、大ひに發明する所あらん。もし亦た此を讀みて聞かすことに、利用せば、更に可らんとて、掲ぐ。女學雜誌に掲載せるもの、今回一冊子として同好の御求めに應ず

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

横山男君著

婚姻論

洋綴中本 二百三拾九頁
特別賣價 金拾六錢
郵便稅 金四錢

目次

(一)總論○(二)婚姻の定則○(三)婚姻は人類の天性○(四)婚姻の效力○(五)婚姻數は社會の衰盛によりて增減す○(六)早婚上○(七)早婚中○(八)早婚下○(九)晩婚○(十)私婚上○(十一)私婚下○(十二)血族婚上○(十三)血族婚下○(十四)濫婚上○(十五)濫婚下○(十六)婚婚上○(十七)離婚中○(十八)離婚下○(十九)正婚○(二十)結婚年齡○(廿一)結婚年齡の差○(廿二)男女共諸法上○(廿三)男女共諸法中○(廿四)男女共諸法下○(廿五)男井互に撰ふ事○(廿六)結婚の境界○(廿七)離婚○(廿八)結論○目次終

東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

文學界

第五號要目 五月三十一日發行

彼の民友子一連のほざきに默すも失禮とわざッと乍ら彼の殿豈へ針一本の寸志、乍聊弊社透谷が一個人の自腹に罫應の献立は

頑執妄排の弊
人生の意義
賤事業辨

に御座候。此他

内部生命論　透谷
俳人の性行と想ふ、　棲月
狂僧、志道軒　天知
悲曲、琵琶法師（結）　古藤庵
伊勢家集講義
阿佛乳母の文　大和田

彙報には、新刊書籍雜誌の批評紹介あり

定價表

	一冊	六冊	十二冊
東京市內	六錢	卅三錢	六拾錢
地方郵稅共	八錢	四拾五錢	八拾四錢

發行所 東京市下六番町六番地 文學界雜誌社

看護婦生徒募集廣告

本年九月看護婦生徒募集候ニ付志望ノ者ハ來ル六月三十日迄ニ南豐島郡下澁谷村日本赤十字社病院へ申込ムベシ

但年齡二十歳以上三十歳以下身幹四尺六寸以上ニシテ健康獨身ノ者ニ限ル猶規則並ニ申込手續ハ病院ニ就テ承合スヘシ

明治廿六年五月

日本赤十字社

前號評論は表紙要目の活字と活版所煙筒撿査との爲に刷上り格別延引し配達太はだ後れ申譯無之候次號よりは活字新調を廢し例の如く刷上げ土曜日中に配達可仕候右御斷り申候也

女學雜誌社發送掛

女學雜誌代價

	六冊	十三冊（半年）	廿六冊（一年）	郵稅
前金	三十五錢	同 七十三錢	同 一圓三十錢	金六錢
府外	三十八錢	同 七十八錢	同 一圓四十三錢	金五厘

明治廿六年四月廿五日内務省許可
明治廿六年五月廿六日印刷
明治廿六年五月廿七日發行

發行兼編輯者　東京市麴町區下六番町六番地　巖本善治
印刷者　仝牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地　根岸高光
發行所　東京市麴町區下六番町六番地　女學雜誌社
印刷所　仝牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍工場（電話十九番）